
Song for Snow

清久 志信

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Song for Snow

【Nコード】

N3645Z

【作者名】

清久 志信

【あらすじ】

ユキとリツ。常に寄り添う二人の絆は、周りが認めるほど確かなものだった。
ゆきと貴久。不倫と取られかねない二人の関係は、とても曖昧で奇妙だった。

過去と現在の二組の男女と、それを取り巻く人々の歌で繋がる絆の物語。

0 Snow Like Ash

空から舞い降りる白いカケラが、指先に触れて雫へと変わる。

眩しくもないのに目を細めて、ゆきは空を見上げた。

暗い色の雲を背景に、純白のはずの雪の華が薄汚れているようにすら見える。それは、花びらというよりも灰と言った方が相応しいように思えた。

いつかも、こんな風に空を見上げたことを思い出す。

その時にはもつと綺麗だったのにと、そう思ってから苦笑が零れた。

それはきつと、一緒に見上げる人の存在があったからなのだと気付いたからだ。

純粹で、ひたむきでいられたあの頃。隣で笑う人の存在が、自身をそうさせていた。

何よりもその人が、雪のように清らかで柔らかく優しかったから。そして、今の自分自身には『花びら』よりも『灰』の方がぴったりだと思えた。

「ゆき」

記憶に重なる声で呼ばれて、振り返る。しかし、そこに立つのは、その記憶の中にある人とは、全くの別人。

それでも、今この場にこの人がいて、こんな風に呼んでくれることが嬉しいとゆきは思っていた。

「何、見てるんだ？」

「……ゆき」

短い問いに、ゆきは少し考えてから簡潔に答える。

「そのままだな」

呆れたような、困ったような、どっちとも取れる笑顔で貴久は呟いた。それに応えるように、ゆきも口角を僅かに上げる。作り慣れていたその表情には、微かな苦味が自ずと混じった。

「ゆきの笑い方って、『ゆき』みたいだな」

唐突な貴久の評価に、ゆきは思わず小さく笑ってしまった。

「貴久さん、それってどんなの？」

「そのままだよ。触れた瞬間に消えそう」

そう言う貴久の微笑の中に、自分と同質のものを感じ取り、ゆきはもう一度空を見上げた。

きつと、『二人』はよく似ている。

そしてこんな風に雪花の舞う日には、二人揃って笑顔を作るのに苦勞をするのだろう。

「ほら、いつもでもこんなところにいたら風邪ひくぞ」

「うん」

貴久に促され、ゆきはゆるやかに一步を踏み出した。

その頬を、ふわりと生まれたての白雪が撫でてゆく。耳元で、懐かしい音が聴こえた気がした。

思わず足を止め、振り向いてしまう。

「どうした？」

「……ううん、何でもない」

広がる風景の先に、探している人がいるはずはない。

わかつてはいるのに、振り返ってしまった自分自身を嗤うように、ゆきは静かに微笑んだ。

車に向かう二人を包み込むように、白銀の花がどこまでも優しく降り注いでいた。

1 Sepia Daily Life

突然、ギターの色音が止まる。

それにつられるようにベースとドラムも止まり、歌っている最中だったリツも声を途切れさせた。

どうしたのかと誰かが訊ねる前に、ユキの視線がリツへと真っ直ぐに向けられる。

「リツ、今日調子悪い？」

訊いているような口調ではあったが、ユキの表情からは確信しているような色が窺えた。

リツは苦笑で誤魔化そうとしたが、ユキが軽く睨みつけると、それを断念するしかなかった。

「何？ リツちゃん風邪？」

「駄目だろ、無理してちゃ」

ベースのヨシノとドラムのシユウが、揃って心配そうな声を掛けるのに、リツは大丈夫だと首を振る。が、それを見ていたユキに、更にきつく睨まれて首を竦めた。

「大丈夫じゃないでしょ。何年リツと一緒にいると思ってんの？」

いい加減、その下手な嘘が通用するとか思わないで欲しいんだけど」

「けど、熱はもう」

「問答無用。今日はもう終わり。家まで送ってくから」

そう言いながら、ユキはさっさと自分のギターを片付け始めた。た。

こうなってしまったユキは、誰が何と言おうと自分の意見を曲げない。それはメンバー全員の知るところで、今のような状況ならば誰も逆らえるはずがなかった。

何故なら、ユキだけでなくリツの強情さも相当なものだからだ。

ここでユキを止めてしまえば、平気だと主張し続けるリツは倒れるまでやりかねない。

ヨシノは素早くリツの荷物をまとめると、それをユキの方へと差し出した。ユキは荷物を受け取ると、椅子の背もたれに掛けてあったコートをリツに向かって放る。

リツはそれを頭から被るようにして受け取った。

「リツちゃん駄目だよ。リーダーの言うことはちゃんと聞かなきゃね」

「そうそう。ユキ母さんは怒らせると後が怖いぞー」

ヨシノに合わせるようにシユウも続ける。ユキは何食わぬ顔で、自分も上着を着込み、荷物をまとめていた。

「二人してユキの味方がよー」

誰も自分の味方に回ってくれないことに、恨めしげにリツは文句を零す。

その額をこつんと小突き、ユキはリツを促した。

「ほら行くよ、リツ」

「お大事にねー」

「ビタミンCと睡眠とれよー」

「あーい」

ヨシノとシユウに見送られ、リツは半ば引きずられるように貸しスタジオの狭い階段を登る。

外へ出ると、まだ日が暮れる時間でもないのに、少し薄暗かった。見上げれば、ビルの隙間から見える空には濃いグレーの雲が厚くのさばり、太陽の光の多くを遮断していた。

「さむっ」

吹き抜ける朔風に、リツは思わず身を縮める。ハイネックのニットを着ていても、首筋をスカスカと風が通り抜けていくような感じだった。

コートの襟を立てて何とかやり過ごそうとするリツの首に、ユキは自分のマフラーを掛けてやる。

「バカリツ。風邪ひいてるならマフラーくらいして来なさい」

「馬鹿じゃねえよ。風邪ひいてるもん」

「自己管理の出来てないおバカだから風邪ひくの」

『馬鹿は風邪をひかない』という格言を主張するリツに、ユキは論理的な返答を返した。

しかし、リツはそれを聞いているのかいないのか、ユキを見て微笑かに笑っている。

ユキは呆れて溜め息を洩らす、リツはただ、ユキがいかにもユキらしい答えを返すことが可笑しかっただけだった。

そんな風に笑うリツの目の前に、ひらりと白い物が舞い降りる。

「あ、ゆき……」

「何？」

「ユキじゃなくて、雪！」

ああ、と納得したように、ユキは視線を頭上へと移した。リツも同じく、隣で空を仰ぐ。

暗い灰色の雲を背景に、幾つもの白いカケラが舞っていた。

それはまるで、ビルの高層からばらまかれた紙吹雪のよう。

「あ……、ユキ、ユキ！ 出来たっ！」

「は？」

「ほらほら！ この間ユキが聞かせてくれた新しい曲！ 歌詞出来た！ ってか、出来そう！」

興奮してまくし立てるリツに、ユキは啞然とさせられる。そして、しばらくすると実に大きな溜め息へと変化した。

「リツ、真性馬鹿でしょ」

「何がさ？」

心底呆れきった様子のユキの物言いに、リツは不満も露わに問い返す。

それに対して、ユキは超特大の溜め息をついてから、一息で返答した。

「風邪！ ひいてて練習切り上げたのはどこのどいつー!？」

「このこのいつ」

リツは目の前のユキを指差しながら、しれっとした表情で答えた。

実際、練習を切り上げる指示を出したのはユキなので、リツの言い分は間違っていない。

間違っではないのだが、

「……こんの、世紀末バカっ！」

ユキの怒りに触れないわけがなかった。ピシッとリツの額にデコピンが炸裂する。

あまりの痛みに、リツは額を両手で押さえてその場に蹲った。スタジオで小突かれた物とは比べ物にならなかったようだ。

「くうっ！ ユキ酷い！ 鬼畜！ サド！ オニー！」

「何？ リツ、一回じゃ足りないの？」

涙目で抗議するリツに、ユキはにっこりと笑みを浮かべた。けれど、その目はまったくもって笑っていない。

「いえ、結構です」

これ以上言うと、更なる悲劇が身を襲うだろうことを感じ取り、リツは引き攣りながら笑顔を作って短く答えた。

心底、リツはユキに逆らえないのだと自覚する。

一方ユキは、反省の色の薄いリツに、何度目かもわからない嘆息を洩らした。

「音楽バカ」

「ユキに言われたくないぞ、ギターバカの作曲バカ」

「歌バカ、作詞バカ」

「バンドバカ」

最後には綺麗に二人の声が重なった。それに顔を見合わせ、堪え切れないように笑い出す。

音楽が好きで、歌うことが好きで、作り出すことが好きで。

そんな大好きなことが目一杯できる、バンドという存在が、大切に愛おしい。

二人にとって、互いの馬鹿さ加減は理解しやすく、心地良かった。だからこそ、一緒に音楽をやっているのだ。

未だに座り込んでいるリツに、ユキは柔らかな笑みとともに手を

差し出した。

「まったく……。うちで書く？」

「おうっ！」

差し伸べられた手を取って、リツは立ち上がる。そして、その手を繋いだまま、二人は歩き出す。

触れている指先は、外気に晒されて冷たくなっていた。

「駄目だぞ、ユキ。ギターリストなんだからもつと指大切にしないと」

「だったら、リツももう少し喉を労わってね。たまには休めないよ」

「歌ってないと、死んじゃうよー」

「バーカ」

口の悪さとは裏腹の笑みを含んだ声音に、自然と零れる笑顔。

いつものやりとりは、どこまでもいつも通りで、そのいつも通りさが嬉しい。

そんな時間と空間は、いつまでも続くと、そう信じて疑いもしない冬の日だった。

#2 Transparent Eyes

「ゆき、どこ行きたい？」

そう訊くと、ゆきは何か言いかけて、すぐにやめる。

いつも同じように何かを答えかけるのだが、数瞬後に返される答えは、きつと最初に言おうとしたものと違うのだろうと貴久は思っていた。

(ゆきの本当に行きたい場所は、どこなんだろうな)

そんなことをぼんやりと思いながら、横目でちらりと助手席のゆきを窺う。

案の定、ゆきは口を開きかけ、すぐに苦笑いでぼやかし、視線を外へと移した。

「天気、いいね」

「夜から雨らしいけどな」

「そうなんだ」

後方に流れ去る景色を見つめたまま、ゆきは質問の答えとは違う眩きを洩らす。

ゆきは何を考えて、その言葉を発しているのか、貴久には判断がつかかねた。一緒にいる時間はそれなりに長いはずなのに、いつまで経ってもゆきは掴みどころがない。

「貴久さん」

「何だ？」

「海、行きたい」

「海？」

「ほら、もうすぐ夏だし」

そう、ふわりと微笑むゆきに、貴久の胸の奥がずきりと痛む。

ゆきの、この笑い方。

哀しそうな、切ないような、ここではないどこかを見るような瞳。初めて逢ったときから、ゆきはこんな風な笑顔を時々見せた。

そして、その諦めに囚われたような瞳に、『ゆき』みたいだと思っただ。

約一年半前。

派手な水音が耳に届いた瞬間、やってしまったと貴久は思った。店までの道の途中、アスファルトの舗装が悪く、雨が降ればいつも大きな水たまりを作る場所がある。歩道も狭く、気をつけて通らないと、歩行者に盛大に泥水を被せてしまうことになるのだ。

それを重々承知はしていたのだが、その時は少し油断をしていた。こんな時間には滅多に人通りがないからと。更に言うと、突然かかってきた仕事の電話に気を取られていたことも大きい。

「悪い！ また後でかけ直す！」

早口で電話の相手に告げ、携帯を放り出す。すぐさまハザードを出して、車を道路脇へと寄せた。

「ごめん、大丈夫！？」

慌てて車を降り、被害者の元に駆け寄る。

二十代前半だろうと思われる、小柄な女の子だった。突然車から現れて声をかけた貴久に、その少女は何故かひどく驚いたような顔をしていた。

「うわ……、これはヒドいな」

それ以外の言葉が出てこないくらい、無残な状況になっていた。少女の着ていた真っ白なはずのコートは、泥と排気ガスの色に染まっている。運の悪いことに、どこかの車が漏らしたオイルまでついていた。クリーニングに出しても、綺麗に落ちるかどうかわからないところだ。

「大丈夫、です」

予想外にも、少女は穏やかに微笑んだ。少し小首を傾げ、ふわりと。

その表情に、貴久の鼓動が大きく跳ねる。

今にも儚く消えてしまいそうな笑みに、心の中がざわめき立つのがわかった。

「い、いや、大丈夫じゃないと思うよ」

何とか気を取り直し、貴久は続ける。

暗くてわかりにくいのが、少女の服は汚れている以上に激しく濡れていた。

冷え込みはこれから余計に厳しくなる時間なのに、濡れた服のままで歩いていては、風邪をひいてしまうことは間違いないだろう。

それに、こんな夜中に女の子を一人歩きさせるといっただけでも十分に危険な気がした。

「乗って。君の家まで送っていくから」

「え、でも……」

「大丈夫、変なことしようとか考えてないから。これでも一応新婚ほやほやだし」

少女を安心させようと、左手をひらひらと振って見せる。その薬指には、まだ真新しい光を放っているシンプルなデザインのプラチナリング。

それを確認して信用してくれたのか、少女はこくりと小さく頷いた。

貴久は安心して一息つくくと、後部座席のドアを開け、置いてあった紙袋からタオルを一枚取り出した。これから自分の店に持っているつもりだったものだ。

「とりあえず、これ使って。洗ってあるから綺麗だし」

「ありがとうございます」

タオルを差し出すと、少女はか細い声で礼を述べ、それを受け取る。

貴久は助手席のドアを開けて、少女を促しながら、問い掛けた。

「家、どの辺？ あ、それと名前……」

「ユキ」

「え？」

ぼつりと呟いた少女の声に、またも心臓が大きく脈打った。少女はそのまま視線を頼りなく彷徨わせ、暗い夜空を見上げている。その視線の先を追って辿り着いたのは、舞い始めたばかりの白い花。

それに貴久は、少女が名を名乗ったのではなく、降り出した雪のことを言ったのだと思った。

「ああ、やっぱり降ってきたか。ますます早く送っていかないとなほら、乗って乗って、えーっと……」

「ゆき」

もう一度、今度は貴久に向かってそう告げる少女に、貴久は考えを改めた。

「あ、ああ、ごめん。『ゆき』って名前のことだったんだ」

なんとなく偶然なんだ、と胸中で思うが、貴久はそれを表情には出さずに謝罪する。

苦笑混じりの貴久に、ゆきは少しだけ目を細めた。

それがまた儚くて、名前の通り『ゆき』のようだと思えた。

寒い寒い二月の、深い夜の出逢いだった。

#3 Coral Dream

リツとユキの関係について、ヨシノはつくづく不思議な二人だと思っていた。

二人は幼なじみなのだと言っている。保育園の年少組から中学一年生まで、ずっと同じクラスだったそう。

もっとも、リツたちの地元はかなり田舎で、小学校には各学年一クラスしかなかったそうだから、そんなにすごいことでもないらしい。他にも同じような友人は何人かいるとのことだった。

高校では同じ学校に通ってはいたのだが、クラスは離れ、疎遠になっていたらしい。

だからあの日、偶然再会するまでは連絡も全く取っていなかった。それどころか、同じ土地の大学に通っていたことすら知らなかったそうなのだが。

「もんのすっごい、ナチュラルなんですけど……」

スタジオで、パイプ椅子に後ろ向きに跨って、誰に言うでもなくヨシノは呟いた。

視線の先には、新しい曲について話し合うリツとユキの姿。二人はヨシノの呟きにも気づかず、熱心に話を続けている。

「ここ、少し歌いにくいんだけど、キー変えていい？」

「え？ 変えるの？ リツなら歌えると思ってそうなのに」

「あのねえ、ワタクシの楽器はナマモノよ？ ユキのギターと一緒にしないでくれる？」

「あれ？ そうだったっけ？ てっきり、この辺にゼンマイが付いてるか……」

「付いてるかいつ！ って、もし付いてたら、オルゴールみたいに音外すことなく便利かも」

「オルゴールってキャラじゃないでしょ」

「うるせえっ！」

どう見ても夫婦漫才だな、などと思いつつ、ヨシノは二人のやりとりを黙って見守った。

そう。長い間離れていたわりに、再会した直後からこの二人はこんな風だったのだ。

再会した瞬間には、ほんの少し張り詰めたような空気を漂わせていたのに、二人きりで何か話して戻ってきた時にはこうだった。

まるで、離れていた間の時なんてなかったかのように。

(さて、いつものパターンなら、そろそろ漫才終了なんだよね) 毎度見慣れた光景は、いつも決まって同じような展開で幕を閉じる。

今日もその予想に違わぬ結末へと、確実に向かっているようだった。

「音階なぞる、綺麗なだけの歌なんかいらないよ。それじゃリツに歌ってもらってる意味がないでしょ？」

ふわりと、ユキがリツに向かって極上の笑みを浮かべる。

リツはそれに照れたように頬を掻いて、けれど嬉しそうに微笑う。

「ユツキーって、もっとクールビューティーだと思ってたのに、実は天然タラシだなー」

「あれは、アイツにだけだろ」

いつの間に戻ってきたのか、シュウがヨシノの隣で呟いた。持っていた袋の中からコーヒーを一本取り出し、ヨシノに差し出す。

今日はシュウがジャンケンに負けたので、コンビニまで使い走りにされていたのだ。

「さんきゅ。そだねえ、リツちゃんにはベタ甘だもんねえ。でも、付き合っていないんだよ、あの二人」

「らしいな」

ヨシノの言葉をあっさりと肯定するシュウに、思わずその長身を振り仰いだ。シュウもその事実を知っているとは思わなかったのだ。

「ユツキーに訊いたの？」

「いや、リツオ。たまたま二人で話してたときにな。ヨシノはアイ

ツにストリートに訊いたんだって？」

「だって、付き合ってるようにしか見えなかったんだもん。だから、『いつから付き合ってたんの？』って……」

ヨシノの問いに、リツは付き合ってたなんかないと苦笑したのを思えている。そして、その後には付け加えた。

「今は歌うことが一番好きだから」と。

その答えに、ヨシノは啞然とさせられた。

間違はなく、リツはユキを好きはずだ。それは誰の目からも明らかほど。

けれど、それよりも歌うことの方が大切だと言い切ったのだ。

「ユキも似たようなことを言ってたよ。似た者同士なんだよな、あの二人」

「そっか。だったら、ほっといてもそのうちくつつくか」

「違うない。さて、おーい、律野夫妻ー！」

シュウがからかうように笑って、話を終えたらしい二人に呼び掛けた。

「誰が夫妻だ、誰が！」

怒ったように見せて、実は照れているだけのリツがひどく可愛らしい。

そう思ったのはヨシノだけでなく、シュウも、そしてもちろんユキも、優しい眼差しで見つめていた。

「怒るなって。ほら、ミルクティー」

「あ、シュウ、ありがとなー」

缶ジュース一つで簡単に懐柔されているリツに、シュウは単純だなと苦笑しつつ、ユキにも残りの一つを差し出した。

「どういたしまして。ユキはブラックで良かったよな？」

「サンキュー。ちょっと休んだら、さっきの続きしようか」

「リツちゃんもユッキーもそんなに休んでないじゃん。あと十分は休憩しようね」

ユキもリツも妥協できない性格だから、練習が始まると根を詰め

過ぎる傾向がある。こうやって、時々ブレーキをかけてやる自分の役目だと、ヨシノは密かに思っていた。

リツがヨシノに微笑みだけで返す。ユキも、自分たちへの気遣いに気づき、苦笑混じりにOKと呟く。

ヨシノの想いは、確実に二人に届いて、返ってくる。

リツとユキの笑顔に、ヨシノはしみじみと喜びを噛み締めた。

それは、このバンドが今のメンバーになってから、何度目かもわからないくらいに感じる想い。

リツもユキもシュウも、ずっと一緒にやっていきたいと、心の底から思える仲間だった。

特にリツは。

リツには、本当に救われている。

自分自身がもっとも苦しんで、何もかも捨て去ろうとしたとき、それをとどめてくれたのがリツだった。

リツがいなければ、今の自分はいなかったのだ。

ヨシノはそっと、左手のブレスレットに右手を添える。

リツが誕生日にくれた、レザーとシルバーで出来たそれに、感謝の想いと、これからの未来への願いを込めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3645z/>

Song for Snow

2011年12月17日09時46分発行